

ボランティアから職員へ

斎藤 実雪

ボランティアとして保育に関って

私が初めていずみ保育所（現在のいずみナーサリー）と出会ったのは、発達臨床学講座の掲示板でした。保育所ができた、ということさえ知らなかったのですが、「保育所でボランティアを募集しています」との掲示を見て、将来保育士として働きたい

と思っていた私は、すぐに担当の教官に相談にいきました。そのときには、週二、三日行ける人でないといけないと思っていたので、週一日でもなんとかボランティアをさせていただけないか、とお願ひしたところ、保育所の皆さんは快く受け入れてくださいました。

ボランティアとして保育に参加するようになった

て、初めて出会ったHちゃん。この人との出会いは、私が「保育士になろう!」と改めて感じさせてくれたものでした。Hちゃんは一日に何度も「トイレ」と言っ、おまるに座る毎日でした。おそらく、Hちゃんなりの不安のサイン、逃げ場であったのではないかと思います。保育所に初めて通いだしたHちゃん、そして初めて定期的にボランティアをすることになった私。どちらも同じように、保育所に対して不安を抱えていたように思います。私はこのHちゃんの「トイレ」の言葉に、ただただついていくことしかできずにいました。一日に十回にわたったこともあったと思います。しかし、どう対応したらよいかわからない中で悶っていたこの経験は、当時の私の「支え」にもなっていたように思います。

そして、私がボランティアとして保育に参加し始めた頃は、保育時間も十時半から十六時半と短く、朝と夕方それぞれ三十分は、職員の皆さんとのミー

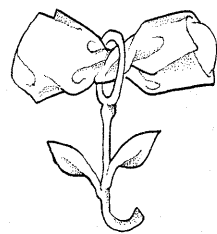
ティングの時間でした。地域の保育園で、短期のボランティアをした経験は何度かあったのですが、そのときにはこれほど丁寧なミーティングの時間はなく、いずみ保育所でのこのミーティングの時間は、私にとつてとても貴重な時間でした。「こんなことで困った」「こんなことが楽しかった」など、職員の方にいろいろと聞いていただき、アドバイスをいただくことで、次の週の保育がとても楽しみでした。

ボランティアの継続もかねて、大学四年次にはインターンシップ生として保育に参加することになりました。仕事内容、保育内容はボランティアのときとさほど変わらなかったのですが、インターンシップということもあり、職員意識をもつよう心がけていました。しかし、実際にはボランティアの頃と変わらなかつたかもしれませぬ。

インターンシップ生として新たにできるようになった仕事の一つは、子どもの連絡帳を書くことでし

た。初めは何を書いてよいのかわからず、また、その連絡帳の大切ささえわかっていませんでした。しかし、回を重ねるごとに、自然に子どもの様子を伝えることができるようになり、また、連絡帳の大切さに気付くことで、見えてくる子どもの姿も変わってきたように思います。

このボランティア・インターンシップとしての約一年半の間、私が子どもとの関係の中で悩んだのは、「どこまで叱ったらよいのか」「どこまで伝えてよいのか」「トラブルに関してどこまで介入してよいのか」ということでした。ボランティアはもちろん、インターンシップでも、本当の“職員”ではなく、また、週一日という限られた時間の中で、子どもとの関係をどう築いていくか……そしてそのある意味「曖昧な」関係の中でどう関ったらよいのか。悩みながらの保育は一年半続いていたように思います。しかし、職員の方の対応の仕方や、言葉のかけ



方などを見て学び、まねさせていただくことで、少しずつ関り方を学んでいったように思います。また、今になって感じるのは、週一日でも保育所で、半日ではなく一日過ごしたことは大きかったと思います。半日のボランティアの方もいましたし、私も都合により半日しか保育に参加できない日もありました。午前中しか保育をしていないと、「午後どうなったかな？」と気になったり、午後からボランティアに行くと、午前中にあった出来事を知らないのです。どこか関りにくい部分もありました。保育は、人と人との関りであり、ある程度の時間を共有することで可能になるということを実感しています。

ボランティアから職員へ

大学四年の十一月。いずみ保育所で次年度四月からの新規採用のお話をいただきました。卒業論文の落ち着いた二月から、研修も兼ねてアルバイトとして週に二〜三日保育に参加していましたが、このときはまだ、子どもにとっては「お姉さん」という存在だったように思います。

四月から職員として働くようになると、子どもからいろいろな場面で「試される」ようになりました。いままで「お姉さん」だった人が、毎日保育所に来て、それまでとは違った対応をするのですから、無理ありません。子どもたちも戸惑っていたのだと思います。この「試される」行動の中で、わがままはどこまで通るのか、どこまでは許してもらえるのかといったようなことに関して、こちらの対応の仕方を見られているような感覚でした。

この「試す」行動の一つが、午睡時によくあらわれていたように思います。私が午睡対応に入ると、寝ないというだけでなく、騒いだり、歩き回ったりと、寝る様子はまったくなかったのです。もちろん、言葉で説明したり、ときには叱ったりすることもありました。それでもなかなか聞き入れてもらえず、他の職員に午睡対応を代わってもらうとすぐに寝付く、ということが毎日のように繰り返されました。できないからといって、いつまでも避けていることも嫌だったので、何度も挑戦しましたが、寝かせることのできない日が続き、悩みの種となりました。しかしその中で「この子はおでこをさすると落ち着くのよ」などのアドバイスをいただくと同時に、自分なりに子ども一人ひとりの特徴を捉えて寝かしつけやわがままへの対応を変えていくと、次第に私が午睡対応に入っても落ち着いて眠るようになりました。それまでなかなか寝てくれなかった子

が寝付く姿はともかわいらしく、いまでは午睡対応を希望するほどになりました。

また、散歩でも“試す”行動は見られました。ボランティアのときには、散歩に出ると手をつないでくれたのですが、職員になってから逆につないでくれなくなったのです。他の職員と二人で四人の子を連れていくときなどは、その相手の職員に四人とも集まってしまうこともしばしばでした。おそらく、ボランティアのときには保育士さんのサポートとして動いていた私が、職員となつてからは、ボランティアのとき以上に安全面や散歩の流れを意識するようになり、子どもの思いに応えきれない部分が増えたことが一因ではないか、と思います。また、“いやと言って拒否したり、話を聞かずにいたら、この大人はどうするか”ということを見られていたように思います。

ボランティアから職員というこの移行時期には、

つらいことのほうが多かつたように思います。しかし、できる限り子どもの思いに応えるようにしながらも、こちらの伝えたいことやどうしても譲れない部分、たとえば、どんなに泣いても今はそれはできない、ということなどをきちんと表現するよう努めました。子どもの思いを受け容れるだけでなく、自分の思いも素直に表現することで、だんだんと子どもと真剣に向き合うことができるようになり、また、保育士として自信をもとうと思うことで、子どもとの関係ができてきました。まだ自信をもつて“関係ができた”とは言えず、“できつつある過程”ですが、“お姉さんとほく・私”という関係から“保育士とほく・私”に変化し、目を見て話を聞き、納得してくれるようになったと思います。

職員として

保育士として働き始めて二年目になりました。

「自分の仕事」として「保育」をすることには大分慣れてきましたが、現在は「待つ・出る」のタイミングの難しさを感じています。「もう少し待つてみたらよかった」と思うことも多く、場の雰囲気や壊さないように場に参加したり、その場から引いたりすることができないでいます。しかし、失敗してしまつたことも無駄にしないようにと、迷つた場面は記録に残すようにしています。そのときには答えは出なくても、少し時間が経つてから読んでみると、違つた対応が浮かんでくることもあります。

また、保育士同士の連携の大切さも、日に日に大きく感じるようになっていきます。今年度に入つてから、一つのテーマに関して保育士全員で意見を出し、話し合う時間もてるようになりました。保育の中での行動について、それぞれの保育士がどんな思いをもっているのか、ということ言葉をしてお互いに伝え合うことで、理解が深まり、より連携し

やすい環境になつていると感じています。

保育に関しては、先輩保育士さんたちにはまったく追いつけないままです。しかし「自分の保育・自分のやり方」を見つけないと思つています。そして、保育だけでなく事務的な仕事においても、自分のできることから始め、できないことも認識した上で、できないことについては今後どのようにしていったらよいか、ということを考え、できるようにしていきたいと思つています。ボランティアをしていた頃は、自分のマイナス面さえ気付かないでいました。しかし、それに気付き自覚することで、自分自身の見直しにもつながると感じています。初めてのボランティアで、Hちゃんのトイレに何度もつきあつていたあの頃の思いも時々思い出しながら、「新たな自分」と「自分の保育」を見つけていきたいと思つています。

(お茶の水女子大学附属いずみナーサリー)